

SHOW HEY シネマールム

★★★★★

ヒッチコックの映画術

2022年 / イギリス映画
配給：シンカ / 120分

2023 (令和5) 年 10月 7日鑑賞
2023 (令和5) 年 10月 18日鑑賞

シネ・リーフル梅田

Data

2023-116

監督・脚本：マーク・カズンズ

出演：アリスティア・マクゴワン (声
の出演)

👁️👁️ みどころ

『クエンティン・タランティーノ 映画に愛された男』(19年)、『ジャン＝リュック・ゴダール 反逆の映画作家』(22年)に続いて、アルフレッド・ヒッチコック監督のドキュメンタリー映画を鑑賞。『裏窓』(54年)、『めまい』(58年)、『北北西に進路を取れ』(59年)、『サイコ』(60年)、『鳥』(63年)等、強く印象に残る彼の作品は多いから、こりゃ大いに期待！

ドキュメンタリー映画は作り方が難しい。時系列に沿って各作品の見どころを紹介？ヒッチコックの生きた時代背景に注目？ヒッチコック映画なればこそその裏話や秘話を公開？そんなやり方ではダメだ。しかして“365日映画を鑑賞する男”で、これまで鑑賞した映画の総本数が1万6000作品に上るというマーク・カズンズ監督が思いついた“あるアイデア”とは！？

1889年生まれのヒッチコックは1980年に死亡したが、本作には、あのでっぱりした体格の彼が登場し、自らの口を通して、自らの言葉で、自らの作品を語っていくから、アレレ・・・？イエス・キリストの“復活”は真実だろうが、ひょっとしてヒッチコックもこのドキュメンタリー映画出演のために“復活”したの・・・？

こりゃ面白い！2日後に観た『アントニオ猪木をさがして』(23年)の工夫のなさ(?)と比べても、ドキュメンタリー映画としての出来の良さ悪しは明白だ！本作の鑑賞を契機に購入した「スクリーンアーカイブズ アルフレッド・ヒッチコック監督 復刻号」に掲載されている計19本をあらためてDVDで鑑賞し、“ヒッチコック芸術の戦慄と陶醉”を味わい、かつ“ヒッチコック監督ののこした偉大な軌跡”を辿ることを決意！

-----*-----*-----*-----*-----*-----*-----*-----*-----*-----*

■□■ヒッチコックのドキュメンタリー映画の監督と脚本は？■□■

近時、巨匠のドキュメンタリー映画が多い。近時、私が鑑賞し、『シネマ 53』に収録した作品が、『クエンティン・タランティーノ 映画に愛された男』(19年)、『シネマ 53』89頁)と『ジャン＝リュック・ゴダール 反逆の映画作家』(22年)、『シネマ 53』131頁)の2本。また、『シネマ 52』には、『モリコーネ 映画が恋した音楽家』(21年)、『シネマ 52』155頁)を収録した。さらに、有名監督のドキュメンタリーではなく、無名のカンフースタントマンに焦点を当てたドキュメンタリー映画が『カンフースタントマン 龍虎武師』(21年)、『シネマ 52』255頁)だった。

これらは当然、それぞれの監督によってアプローチの仕方が異なっていた。例えば、『クエンティン・タランティーノ 映画に愛された男』は、これまでのわずか8本の映画で巨匠とされ、しかも10本で引退すると宣言するタランティーノ監督本人抜きの、関係者だけの身近かつ本音の証言で構成されていた。また、タランティーノ監督には、ある“重大な恥部”があったため、同作ではそれをどう撮るのが大きな注目点だった。

他方、「ゴダールといえば反逆の映画作家」、そして「ゴダールといえばヌーヴェル・ヴァーグ」だから、『ジャン＝リュック・ゴダール 反逆の映画作家』は、そのタイトル通り、第1章から第4章までの章立てで、彼の反逆の映画作家ぶりが多くの友人や女優たちの口から語られ、また「ヌーヴェル・ヴァーグの花嫁」と呼ばれた女優アンナ・カリーナの映像で綴られていた。

すると、巨匠アルフレッド・ヒッチコック監督のドキュメンタリー映画の監督は一体誰が務めるの？そして、脚本は誰が書くの？そう思っていると、何とヒッチコックのドキュメンタリー映画たる本作は、ヒッチコック本人が「自身の監督作品の裏側を語る」というスタイルで、その面白さの秘密を解き明かしていくドキュメンタリー作品だと知ってビックリ！しかし、そんなことが可能なの？たしか、1889年生まれヒッチコック監督は1980年に死亡したはずだが・・・。

■□■この男はすごい！この男なら本作の監督に最適！■□■

本作の監督・脚本はヒッチコック本人？いやいや、さすがにそれはありえない。だって、彼は1980年に死亡しているのだから。

本作の監督は、これまでの人生で鑑賞した映画の総本数が1万6000作品に上るというマーク・カズンズ監督だ。そんな男が地球上に存在することを私が知ったのは、『ストーリー・オブ・フィルム 111の映画旅行』(21年)、『シネマ 51』70頁)を観たとき。彼が「映画を取り巻く環境や表現手段が劇的に変わった2010年～21年の11年間にスポットを当てて“厳選”した111本の映画を167分間にわたって論評した」のが同作だった。その111本のうち、私は35本を鑑賞し評論しているからすごいものだが、彼は“365日映画を鑑賞する男”だから、人間離れしているとしか言いようがない。そんなマーク・カズンズは、まさにヒッチコックという巨匠のドキュメンタリー映画の監督には最適だ。

本作のパンフレットにはマーク・カズンズの「Director's Statement」があり、そこで彼は、「一人称」の映画だったらどうだろう？ヒッチコック自身が映画を語り、アーカイブ映像や古いインタビューは使わない。新たに長いモノログを書いて、ヒッチコックのような声を出せる人に声を当ててもらったらどうだろう。」というアイデアを思いついたようだ。2004年に発表した著書『The Story of Film』が世界各国で出版されると、タイムズ紙で“今までに読んだ映画についての本の中で最も優れた作品”と評され、同書を元に製作された930分にも及ぶ超大作『ストーリー・オブ・フィルム』(11年)を自ら監督したマーク・カズンズなら、ヒッチコックの全作品を年代順に観直すことなどチョロイもの。数ヶ月かけて“彼のノート”がいっぱいになった段階で、ノートにはさみを入れて切り分けながら脚本を完成させたそうだ。なるほど、なるほど。

しかし、一人称のアイデアはいいとして、ヒッチコックの声は誰が担当するの？私にはそれが疑問だったが、スクリーン上に流れてくる声は、紛れもなく、あのヒッチコックの声！私が完全にそう錯覚するほどの声で、自らの映画(?)を振り返る“声の出演”をしたのは、友人からの紹介でアリスティア・マクゴーンに決まったそうだ。なるほど、なるほど。

ヒッチコック映画の特徴は何よりも観客をあっと驚かせることだが、ヒッチコックのドキュメンタリー映画である本作も、マーク・カズンズ監督のそんなアイデアのおかげで、最初から私を含む観客をあっと驚かせることに大成功！

■□■時系列による整理ではなく、6つの視点から分析！■□■

『ジャン＝リュック・ゴダール 反逆の映画作家』は、時系列順に4つの章でゴダールの生きざまとゴダール映画を整理していた。しかし、本作はそうではなく、①逃亡、②欲望、③孤独、④時間、⑤充実、⑥高さ、という6つの視点から、下記の計49本のヒッチコック作品を分析するという手法をとっている。

【本作で引用されるヒッチコック作品】 9年代順, (TV) - TV映画	
『快楽の園』(1925)The Pleasure Garden	『暗殺者の家』(1934)The Man Who Knew Too Much
『下宿人』(1927)The Lodger	『三十九夜』(1935)39 Steps
『ダウンヒル』(1927)Downhill	『サボターージュ』(1936)Sabotage
『リング』(1927)The Ring	『第3逃亡者』(1937)Young And Innocent
『農夫の妻』(1928)The Farmer's Wife	『バルカン超特急』(1938)The Lady Vanishes
『シャンパーニュ』(1928)Champagne	『叢窟の野獣』(1939)Jamaica Inn
『マンタスマン』(1929)The Manxman	『レベッカ』(1940)Rebecca
『恐喝(ゆすり)』(1929)Blackmail	『海外特派員』(1940)Foreign Correspondent
『ジュノーと孔雀』(1930)Juno And The Paycock	『スミス夫妻』(1941)Mr. And Mrs. Smith
『殺人!』(1930)Murder!	『断崖』(1941)Suspicion
『リッチ・アンド・ストレンジ』(1931)Rich And Strange	『逃走迷路』(1942)Saboteur
『第十七番』(1932)Number 17	『疑惑の影』(1943)Shadow Of A Doubt
『ウィンナー・ワルツ』(1934)Waltzes From Vienna	『救命艇』(1944)Lifeboat

『白い恐怖』(1945)Sp@h@nd	『間違えられた男』(1957)The Wrong Man
『汚名』(1946)Notorious	『めまい』(1958)Vertigo
『パラダイン夫人の恋』(1947)Paradine Case	『北北西に進路を取れ』(1959)North By Northwest
『ロープ』(1948)Rope	『サイコ』(1960)Psycho
『山羊草のもとに』(1949)Under Capricorn	『鳥』(1963)The Birds
『舞台恐怖症』(1950)Stage Fright	『マーニー』(1964)Marnie
『見知らぬ乗客』(1951)Strangers On A Train	『引き裂かれたカーテン』(1966)Torn Curtain
『私は告白する』(1953)I Confess	『トパーズ』(1969)Topaz
『ダイヤルMを廻せ!』(1954)Dial M For Murder	『フレンジー』(1972)Frenzy
『裏窓』(1954)Rear Window	『ファミリー・プロット』(1976)Family Plot
『泥棒成金』(1955)To Catch A Thief	〈一部監督作品〉
『ハリーの災難』(1955)Trouble With Harry	『Memory of the Camps』(1945)(TV・日本未公開)
『知りすぎた男』(1956)The Man Who Knew Too Much	

この6つの視点による分析がマーク・カズンズ監督の脚本のキモだが、その分析は興味深い。私はヒッチコック映画が昔から大好きだが、こんなに多くの名作を分析していることにビックリ！また、本作のような6つの視点からヒッチコック映画を分析すると、こんなに興味深くヒッチコック映画を鑑賞できることにビックリ！もっとも、1920年代の無声映画はもとより、『農夫の妻』(28年)や『恐喝(ゆすり)』(29年)は全く知らないし、30年代の『三十九夜』(35年)や『バルカン超特急』(38年)も、40年代の『汚名』(46年)、『パラダイン夫人の恋』(47年)も私は知らない。しかし、私はヒッチコック作品として本作に登場する49本のうち、『レベッカ』(40年)、『ダイヤルMを廻せ!』(54年)、『裏窓』(54年)、『泥棒成金』(55年)、『知りすぎた男』(56年)、『間違えられた男』(57年)、『めまい』(58年)、『北北西に進路を取れ』(59年)、『サイコ』(60年)、『鳥』(63年)、『引き裂かれたカーテン』(66年)等を観ているのだから立派なものだ。

本作鑑賞後、私は本作のパンフレットはもとより「スクリーンアーカイブズ アルフレッド・ヒッチコック監督 復刻号」を2640円で購入。そこには計19本のヒッチコック映画が紹介されているから、今後あらためてその全作品をビデオで鑑賞することを決意！

■□■「ヒッチコックの空想インタビュー」は必読！■□■

『聖書』によれば、イエス・キリストはローマ帝国の手によって十字架にかけられ、処刑されたが、その直後に“復活”を果たしたそうだが、それは彼が“神の子”なればこそこの業だ。しかし、本作のパンフレットを見ると“空想の”という形容詞がつけられているものの「ヒッチコックの空想インタビュー」が収録されているので、これは必読！

そこでは、さまざまな質問に対してヒッチコック自身(?)が誠実に答えているが、私が最も面白いと思ったQ&Aは「あなたにとって映画とは?」の質問に「ドイツで無声映画に携わっていたときから、映画とはフロイトが書いたことを映像化したものだ」と理解している。映画とは、光り輝く、愉快的な火山の噴火だ。私たちが恐れていること、隠してい

ること、密かに喜んでいることについての輝かしくて、生々しい物語だよ。」と答えていること。これは、イギリスからアメリカに渡って大成功し、1899年から1980年までを生きたヒッチコックのような“豊かな人間”なればこそ言葉だと痛感！

もう1つ、「映画は嘘つきの芸術だ」と思っている私が興味深かったのは、「映画はいつだって嘘つきなのでしょうか？そうではないケースはありますか？」との質問に、「いいかね、映画は嘘はつかないよ。ただ省略するだけさ。私は映画の中で、日々の生活の様子を見せることはほとんどなかった。なぜならそういうことは観客の方が詳しくあったからだ。私は、観客が手を伸ばすけれど触れられないものを見せたのだよ。」と答えていること。これらの「ヒッチコックの空想インタビュー」の言葉の奥深さをじっくり考えたい。

■□■『アントニオ猪木をさがして』との出来の違いを痛感！■□■

私は本作を鑑賞した2日後の10月9日に『アントニオ猪木をさがして』(23年)を鑑賞した。これは、「新日本プロレス創立50周年企画」として、闘病中のアントニオ猪木が目細めた嬉しそうな顔をしながら合意し、進められてきた、アントニオ猪木のドキュメンタリー映画だが、2022年10月1日に彼は死亡したため、完成作を見ることができなかった。しかし、私の予想では、彼の寿命がもう少しあり、ベッドの上で同作を見れば「何だ！この出来は！」と怒り狂ったのでは・・・？逆に、ヒッチコックのドキュメンタリー映画である本作を見せれば、「これは素晴らしい！」と叫んだのでは・・・？

“燃える闘魂”をキャッチフレーズとし、生涯“ストロングスタイル”を貫いたプロレスラー・アントニオ猪木のリング上での数々の名試合は、いろいろとコメントをつけなくても、それだけで感動し魂を打つものだから、彼のドキュメンタリー映画を作るのならそれを選び編集するだけでも十分だ。しかし、それだけでは工夫がないから、何がしかのアイデアが必要だが、この完成作品は一体ナニ？講談師・神田伯山の講談や、俳優の安田顕、徳井優等のインタビュー対談をふんだんに盛り込んだばかりか、三原光尋監督にドラマパートを担当させたのが和田圭介監督の工夫、アイデアだろうが、その成否は？私はハッキリ言って、それは失敗だと思うので、同作の“出来の悪さ”と対比しても、本作の素晴らしいさが浮かび上がることに・・・。

そんな対比の中で、ドキュメンタリー映画の作り方の難しさをあらためて考えるとともに、本作でマーク・カズンズ監督が見せたアイデアの素晴らしいさに拍手！

2023(令和5)年10月12日記

追記

なお、本作は10月18日にも、他の映画鑑賞の合間に2度目の鑑賞をしたが、そこでもあらためて本作の良さを再確認！

2023(令和5)年10月18日記